一般の部
最優秀賞

モサ、タケ、ミーちゃん、有難う

高須　健之（たけし）

　パソコンを開くと、子猫のミーコは机に飛び乗り左に座りニャアと言う。頭をぴょんとたたくとニャアニャアだ。その声を聴き親猫のモサとタケが、右側にニャアと言い飛び乗ってくる。
「いいか、今日は、お前たちのアルバムを作るからな」
と、スキャンをしたミーコたちの姿を画面に出すと、眼を丸くして興味津々だ。
「それだけじゃないぞ、お前たちの詩を添えてやるからな」
と、書き始めた。するとマウスに乗せた私の右手をトントンとたたく。
「おい、タケ、なんだよ」
と、言いながら画面を見ると、変換した漢字が違っているのだ。偶然とはいえ微笑ましく、頭をトントンと優しくたたくと、ニャアと嬉しそうな声を出した。
　感心するのは一時間でもそのまま付き合うのだ。
「疲れただろう、散歩に行ってこいよ」
と、頭をたたくと、さっと机から飛び降りガラス戸の前にまっしぐらだ。
「いいか、近所に迷惑をかけるんじゃないぞ」と、ガラス戸を開けてやると、何処へ行くのやら、二時間ほどは帰ってこない。
　帰ってくりゃ、開けろ、開けろとガラスを猫パンチだ。
「コラうるさいぞ」
と、開けてやると、三匹そろって、ニャア、ニャア、ニャアと飛び込んできて、パソコンの前にうずくまる。

「貴方も、ミーコたちも、幸せそうね、こんな生活が出来るようになるとは思いもよらなかったわ、明けても、暮れても、仕事、仕事でしたものね」
　妻は、傍らで見つめながらしみじみと言う。
「そうだね、資金繰りや、納期にあおられて、一年中、仕事が頭から、離れなかったことを思えば、今は、スポーツジム、図書館通い、自分の意思で過ごせるとはね、ミーコたちとの出会いに感謝しなくちゃ、と思うよ」
「そうだわねえー」
妻も、今の生活が満足そうだ。

　ミーコたちとの出会いは、四年ほど前になる。工場の敷地内にある、使われていない物置に住み着いたのが、ミーコたちだった。
　不法侵入だなんて、野暮なことは言えないほどの可愛さに、従業員たちが、
「このまま、住まわしてあげましょうよ」
と、皆のアイドルになり、次第に慣れ親しみ、子猫はミーコ、親猫は、モサ、タケ、と名付けられ、工場の敷地内を親子でじゃれ合い楽しそうに駆けずりまわっていた。
　だが、当然だが、夜間は工場には誰もいなくなる。最後の従業員が、機械を止めると、ミーコたちは、寂しいのだろう、側に三匹そろって、座って離れないのだ。
「なあ、君たち、明日また会えるじゃないか」
と、言うと、言葉を察するのだろうか、物置へ、すごすごと帰る日々だった。

　そんな、ある日のことだった。
「社長、電話です、自動車工業さんの、担当者さんが、もう、納期が過ぎているんだぞ、社長を出せ、とカンカンに怒っています」
と、事務の女性があわてふためいている。
　困ったなと思いながらも、電話に出ないわけにはいかず、受話器を受け取ると、
「こんなことが続くようじゃ、取引停止にするぞ、どうするんだ」

と、怒鳴っている。なにせ、相手は、大手自動車メーカー、受話器を持ちながら自然に頭を下げていた。言われてみれば、相手の言うことは、もっともなので、
「すいません、これからは努力いたしますので」
と、電話を切り、ふと、窓の下を見ると、ミーコたちが、無邪気に遊んでいる。
「おい、ミーコ、楽しそうだな、お前たちは無邪気だなー、うらやましいよ」
と、声をかけると、
「何か心配事でもあるの」
と、トントントンと階段を駆け上がり、私のそばに座り、ニャアと、猫パンチをするのだった。

そんな猫たちのシンプルな光景を日々眺めていると、次第に、自分が余裕のない人生を送っていることに、疑問を持つようになっていった。

複雑な人間社会をどう生きぬくか、模索していた夜間高校生時代、犬や猫たちの生きざまに、思いをはせるなんてことは、ほとんどなかった。

何とかせにゃならんと工場を立ち上げ、経営者の仲間入りをしたのだったが、資金繰りだ、営業だと、何ら心のゆとりは持てず、揺れ動く世間の厳しさ、激しさに振り回される日々だった。

金融緩和の時には銀行が金を借りてくれ、ゴルフ会員権の購入でも、株でも何でもいいから使ってほしいと毎日のように来ていた。

一転して金利を急激に上げ、引き締めに入ると、銀行は融資の枠はないなどと言い出す。

そんな、国の政策に翻弄される世界に、身を置く経営者の情けなさに、窓から眺める子猫たちの姿が、私に、新たな生き方を考えさせるのだった。

そんな折、決断させることが起きた。

「社長、金属工業さんから、まだ入金がないのですが」
と、経理の担当者が心配そうに言う。
「ええっ、電話をしてみたの？」
「ええ、全然つながらないのですよ」
私はこれを聞いて駄目だと思った。おそらく倒産して、雲隠れしてしまったのだろう。
「念のため、当座預金に資金を移しておいて」
我が社の振り出した手形の決済資金のこともあり、指示するのもなさけないが、やむをえなかった。

翌日、金属工業を訪ねてみると工場は、機械など債権者に持っていかれてしまったのか、もぬけの殻、倒産して、社長は行方不明になっていた。
日銀総裁が変わってからの、金融引き締めは、多くの企業の倒産を生んでいた。金属工業の例をみると、とても他人事とは思えなかった。
いくら、努力しても、どうしようもないことが起きることだってある。当然入金があるだろうと、資金計画をしていても、このようなことが、突然起こりうるのだ。たまたま、資金があったから、振り出した手形の決済は出来たが、そうでなければ、我が社も、手形を落とせず、倒産ということになっていたかもしれないのだった。

このことが、私が、経営者としての人生を変えた、きっかけになったのだった。
そんな気持ちは、ミーコたちは知る由もなく、なにも縛られるものがないのだろう駆けずりまわって楽しそうだ、
見習おう。私は工場を閉鎖しようと決心し、多少の蓄えも、あったこともあり、工場を売却し、退いた。

人生を教えてくれたミーコたちと別れな

ければならないのは、無責任に思え、気掛かりだったが、別れなければならない日がやってきた。
「ミーコたちありがとうな」
人と人との別れとおんなじだ。それ以上の言葉が出なかった。普段と違う私の様子に、ニャアとも言葉が出てこないのだ。
「ミーコたち、あとの工場の人たちに可愛がってもらうんだぞ」
と、車に乗ろうとすると、ミーコ、タケ、モサが、並んで、私を見上げている。その目は潤んでいるように見えた。私はそれぞれの頭を撫でるのが精いっぱいだった。
「さようなら」
そして、車のドアを開けた。すると、親子三匹、ニャア、ニャア、ニャアと言って、運転席にとび込んできたのだった。
私がもう帰ってこないということが、わかったのだろうか、普段はどこへ出かけようとも、一度もそんなことがなかったのに、信じられない事だった。
人間と猫、言葉は通じなくとも、心という言葉は通じ合えるのだと、私は涙が止まらなかった。
「ごめんな」
何も別れることはないんだ。一緒に我が家で暮らそう。なぜ、そんなことを考えなかったんだ。私は、ミーコ、タケ、モサを抱きしめて、家に連れて帰った。

今日も、工場よりは狭いが、我が家の隅々まで駆けずりまわっている。
「ミーコ、タケ、モサ、工場と、我が家と、どっちがいいんだよ」
「ニャア、ニャア、ニャア」
「おいおいおい、それじゃ、どっちでも、良いってことかよ」
楽しい、心の通う会話があった。
「猫さんたちに感謝をしないとね、貴方に決断させてくれたのはこの子たちなのよね、ミ

ーコたちが私たちに幸せをくれたのよね、感謝、感謝だわ」
と、口癖のように言う妻も、一緒に駆けずりまわっている。我が家はにぎやかだ。

人生の途中で会社を清算した経営者としては失格だろう。
だが、複雑怪奇な人間社会に身を置くよりも、シンプルな世界を教えてくれたミーコたちとの触れ合いを選んだことに後悔することはない。
昨今、ウクライナでの戦争を見ると、複雑だからこそ起きるのだろう。人間同士の殺し合いをミーコたちはどう思うだろう、
「なあ、ミーコたちよ、人間っていうのは、君たちより、えらいのかね」
「ニャア、ニャア、ニャア」
「何だよ、悲しそうな眼をするじゃないかよ、そうだなあ、悲しいか」
そうか、同情してくれているのか、私は、ミーコ、タケ、モサに頬ずりし、考え込んでしまっていた。

（千葉県千葉市）